



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 89

May 2023

目 次

○諸報告

2023 年度日本植物分類学会第 22 回大会

(千葉) の報告 2

2023 年度大会発表賞の報告 3

2023 年度大会発表賞受賞者喜びの声 4

2023 年度総会議事抄録 7

2023 年度事業計画および予算 8

2022 年に到着した交換図書一覧 8

○寄稿

編集委員長の 10 年 9 ヶ月間を振り返る 9

○お知らせ

2023 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ 12

国際植物分類学シンポジウム

”The 10th East Asian Plant Diversity and Conservation

2023” のご案内 13

日本植物分類学会 第 23 回大会（仙台）のお知らせ 14

○書評

岩槻邦男著 「Spherophylon」 14

○会員消息 16

諸報告

2023 年度日本植物分類学会第 22 回大会（千葉）の報告

第 22 回大会会長 綿野泰行

第 22 回大会実行委員長 朝川毅守

コロナ禍による 2 回の全面オンラインの大会を挟んで、4 年ぶりに千葉大学において現地での対面による大会開催を行うことができました。参加・発表申し込みを年明けから開始とするなど、時間的に厳しい日程を強いてしまいましたが、迅速に対応いただき、ここに深く感謝いたします。また、できる限り多くの方に参加いただくためにオンライン配信も試みましたが、音割れ等が発生し、ご迷惑をおかけしたと感じています。マイクの音声を会場で拾う際に、会場での音の反響が音質劣化に影響するらしく、なかなか難しい問題でした。懇親会も会場の隣の生協で行いましたが、私も含め久しぶりの懇親会だった方が多かったのではないのでしょうか。千葉大学のコロナ対策が変更になり、学会懇親会を学内で開くことができたのは、幸運でした。

1) 大会概要

日本植物分類学会第 22 回大会を 2023 年 3 月 1 日（水）～ 5 日（日）にオンライン（Zoom・LINC Biz）と対面（千葉大学けやき会館）の併用で開催しました。参加総数は 242 名で、内訳は一般 167 名、学生 75 名でした。現地参加されなかった方は 91 名でしたので、オンライン参加のみの方も多数おられたようです。研究発表では、51 題のポスター発表と 50 題の口頭発表がありました。そのうち、ポスター発表 22 題・口頭発表 23 題が発表賞の審査対象となりました。3 月 4 日の懇親会の参加者は 105 名（一般 91 名、学生 14 名）でした。3 月 5 日には公開シンポジウム「今身近な自然に迫る危機」を行い、7 名の演者にご講演をいただきました。公開シンポジウムのオンライン視聴申し込みは 56 名、対面参加者は 44 名でした。

2) 収支

第 22 回大会の収支は、以下の通りです。本大会および公開シンポジウムについては、千葉大学との共催としたため、会場である千葉大学けやき会館の利用料が無料となりました。そのおかげで、ハイブリッド開催としたにも関わらず、余裕のある運営が可能となりました。

収支		支出	
前年度繰越金	369,179	zoom 契約料	21,340
大会補助金	100,000	LincBiz 契約料	151,580
大会参加費	923,000	PC レンタル料	17,400
懇親会参加費	638,000	プログラム・要旨集印刷費	99,600
		要旨集・参加費領収書輸送費（オンライン参加者）	22,750
		名札印刷費	42,438
		公開講演会要旨集印刷費	22,462
		公開講演会演者交通費	9,648
		スタッフ宿泊費	42,351
		スタッフ交通費	10,674
		アルバイト謝金	318,600
		託児所運営費	98,030
		文具・通信・本部経費等	99,882
		送金手数料	2,640
		懇親会費	610,740
		大会補助金返金	100,000
		次年度繰越金	360,044
収入合計	2,030,179	支出合計	2,030,179

3) 大会組織

本大会実行委員会は、以下の構成メンバーで運営を行いました。岩崎さんはコロナ禍以降3大会連続での ZOOM 担当です。本当に感謝しかありません。藤原さんも昨年度から連続で、LINC Biz のお世話をお願いしました。現地開催では裏方で DJ のようにマイクの音量をあやつり、オンラインでの音質改善に努力してくれました。高橋さんには厳しい日程の中、プログラムと要旨集の編集をこなしていただきました。あの美しく見やすい要旨集はひとえに高橋さんのご尽力のおかげです。片山さんには、大会ロゴとホームページ作成・維持をお願いしました。視認性に優れたホームページのデザイン、ありがとうございました。最後に渡辺さんには、きっちりと財布のひもを管理いただきました。

大会会長 綿野泰行（千葉大学・院・理学）
 実行委員長 朝川毅守（千葉大学・院・理学）：公開シンポジウム・懇親会
 実行委員 岩崎貴也（お茶の水大・基幹研究院）：ZOOM・事務局
 藤原泰央（東京都立大・牧野標本館）：ポスター発表
 高橋佑磨（千葉大学・院・理学）：プログラム・要旨集
 片山なつ（千葉大学・院・理学）：託児・ロゴ・ホームページ
 渡辺洋一（千葉大学・院・園芸学）：名札・会計

4) 課題等

本大会では参加・発表申込みを、ホームページから行う事に限定し、紙媒体も e メールでの申込みも止めてしまいました。半分コロナ禍という状況に甘えてしまった訳ですが、参加をあきらめてしまった方もおられたのではないかと思います。少なくとも e メールでの申込みは残しておいた方が良かったと反省しています。

学会賞受賞者の参加費・懇親会費についてどのように扱うかという点については、学会と大会実行委員会の間の連絡が悪く、例年同じように運営されている訳ではないようです。学会会計が逼迫しているため、新たな方針を作った方が良いという学会長の意見があります。十分に時間的余裕を見て、この件の方針を決めておいた方がよいでしょう。

2023 年度大会発表賞の報告

大会発表賞選考委員長 藤井伸二

2023 年度大会発表賞には合計 45 題のエントリーがありました。内訳は、口頭発表 23 題、ポスター発表 22 題（うち 2 題は発表をキャンセル）でした。11 名の選考委員が各発表について「研究内容」と「プレゼンテーションのうまさ（ポスター発表は視認性の良さとわかりやすさ）」の 2 つの指標について採点を行い、集計結果を踏まえた合議によって計 4 題（口頭発表賞 2 題・ポスター発表賞 2 題）が大会発表賞に選ばれました。

分子解析が主流となる中でそれに頼り切らない独自のアイデアや手法を使った研究、地域的な集団分化の多層的現象を集団動態の視点に基づいて丁寧かつ緻密に解析した研究などが高く評価されました。受賞者の皆様、おめでとうございます。



図1. 授賞式の様子

口頭発表賞（大会プログラム掲載順）

A02 伊藤雄氣（大阪公立大・植物園）

「ヒカゲノカズラの根の特徴から推定する小葉類の地下器官の進化」

A08 松本哲也（岡山大）

「岡山県産広義マムシグサを対象とした訪花キノコバエ相に基づく隠蔽種の探索」

ポスター発表賞（大会プログラム掲載順）

PA07 村上将希（東北大・院・生命）

「日本産アジサイ属アジサイ節における異所的種分化過程の解明：いつ、どこで起きたか？」

PA11 高橋弥生（お茶の水大・理）

「地域固有種に注目したスマレサイシン節の系統分化と集団動態の解明」

2023 年度大会発表賞受賞者喜びの声

口頭発表賞（大会プログラム掲載順）

A02 伊藤雄氣（大阪公立大・植物園）「ヒカゲノカズラの根の特徴から推定する小葉類の地下器官の進化」

大阪公立大学附属植物園の伊藤雄氣です。この度は口頭発表賞を頂き、誠にありがとうございます。専門外でも分かりやすかったと言っていただけたのが大変嬉しかったです。

私は現生小葉類のヒカゲノカズラを観察し、化石植物との比較により小葉類の地下器官の進化を解明する研究を行っています。

小葉類は維管束植物の初期に分岐した系統で、茎も根も二又分枝を行います。この小葉類は植物の中で最も早く根の祖先器官を獲得しました。デボン紀の化石小葉類、ドレパノフィクス科の匍匐茎は K 分枝と呼ばれる 2 回の近接した二又分枝を行うことで、その一方の軸を下方に成長させ、担根軸という地下器官を作りました。担根軸は不等二又分枝を行い、根の祖先器官である根様軸を形成しました。こういった体制は現生の小葉類、イワヒバ科にも受け継がれました。イワヒバ科は、匍匐茎の分枝の内角にある分枝角分裂組織から担根体と呼ばれる地下器官を形成し、そこから専ら根を発生させます。一方、ヒカゲノカズラ科では、姿はよりドレパノフィクス科に似ているのにもかかわらず、これまで担根体を持たないと考えられてきました。

本研究ではヒカゲノカズラの茎から内生発生した初生根が、これらの担根軸や担根体と相同であることを示しました。アプローチは、樹脂連続切片を用いた 3D 像復元による分枝位置の特定、クロロフィル蛍光の測定、そしてチミジン類似物質である EdU を用いた細胞分裂動態の観察の 3 つで、何れにおいても担根軸や担根体と共通する特徴を示すことができました。この研究により、これまでヒカゲノカズラで根とされてきた器官には担根体と根の 2 種類の異なる器官が含まれることが示唆されました。また、ヒカゲノカズラは約 4 億年前の体制をほとんど変えることなく受け継いでいると言えます。

小葉類はかつて大繁栄したものの、その後種子植物の台頭に押され、現在では細々と生き残っているグループですが、だからこそそのしぶとい生き様と太古の植物の姿を保存する点で非常に興味深い分類群です。その進化を解明するために、今後も研究に励んでまいります。最後に、本研究では様々な方にお世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。



図 2. 伊藤雄氣さん



図 3. 授賞式の様子



図 4. ヒモカズラ（イワヒバ科）の匍匐茎から発生する担根体



図 5. ヒカゲノカズラの匍匐茎から発生する初生根と分枝した根

A08 松本哲也（岡山大）「岡山県産広義マムシグサを対象とした訪花キノコバエ相に基づく隠蔽種の探索」

茨城大学の松本哲也です。この春、岡山大学から異動しました。学生時代から一貫してテンナンショウ属の生活史を研究して参りましたが、その傍ら分類学にはずっと憧れを抱いていたので、発表賞をいただけて大変うれしく思います。

日本には 53 種ものテンナンショウが分布し、よく自生地では複数種が混生しています。これらの種間で人工交配すると容易に雑種ができるにもかかわらず、なぜ複数種が独立性を保ちつつ共存できるのか、博士論文ではこの問題に取り組みました。そして、どうやら種ごとに異なる送粉者を誘引することが生殖的隔離として重要らしいと分かりました。この結果にはそれなりに満足したのですが、これを憧れの分類学に応用できないかと、新たに始めたのが今回発表した仕事です。

どうせなら、まだ誰も気づいていない「種」を見つけたいということで、実体のよく分からない岡山県の広義マムシグサに白羽の矢を立て、2年間でむしやりに県内全域で送粉者を採取しました。その結果、形態では区別できないものの異なるキノコバエを誘引する 2 タイプが存在し、遺伝的にも多少分化していました。調査の過程で混生集団も見つかり（隣り合う似たような花序間でも訪花昆虫が異なる様子は感動的でした）、生殖的隔離の強度も計算できました。その値から、今回見つかった 2 タイプは送粉者シフトに伴う種分化の初期段階にあると考えています。

気になるのは、結局これら 2 タイプの名前は何なのか、ということです。これまで岡山県の広義マムシグサは、カントウマムシグサもしくはコウライテンナンショウと呼ばれてきました。残念ながら両種とも実体が曖昧で、どこまでが 1 つの種なのか、十分な検討がなされていません。このたび茨城大学へ異動したことで、本当の「カントウ」マムシグサはどういったものなのか、思う存分観察する機会を得ました。名だたる先人たちを苦しめてきた超強敵ですが、「人間がうまく区別できないならキノコバエに見分けさせてみる」という手法がどこまで通用するか、さっそく試しているところです。



図 6. 松本哲也さん



図 7. 関東地方の「カントウ」マムシグサ

ポスター発表賞（大会プログラム掲載順）

PA07 村上将希（東北大・院・生命）

「日本産アジサイ属アジサイ節における異所的種分化過程の解明：いつ、どこで起きたか？」

東北大学の村上将希です。この度はポスター発表賞をいただき、大変うれしく光栄に思います。

アジサイ属アジサイ節は多様な地域固有の分類群を含み、日本列島に広く分布しますが、その分化の実態についてはこれまで明らかにされてきませんでした。今回の分子系統解析の結果、認識されている分類群のほとんどは遺伝的に分化していることが明らかになりました。分子系統樹の推定によって各分類群の系統的位置が明らかになったことで、今後分類学的取り扱いが再検討されると期待されます。また、分岐年代推定の結果からアジサイ節の多様化は比較的近年に起こり、更新世以降の寒冷な時期の中で隔離と分化が生じたことが示唆されました。今後さらに解析を進めていくことで、アジサイ節の多様化が生じた背景についてより詳細に明らかにしていきたいと考えています。

本研究でのサンプル収集や解析にあたって、非常に多くの方々にお力添えいただきました。また、大会期間中にも多くの方から有益なコメント、アドバイスをいただきました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。今後も関心を持っていただけるような面白い研究を発表できるよう、より一層精進してまいります。この度は誠にありがとうございました。



図 8. 村上将希さん



図 9. ヒュウガアジサイ (宮崎県)



図 10. ヤマアジサイ (関東地方)

PA11 高橋弥生（お茶の水大・理）「地域固有種に注目したスミレサイシン節の系統分化と集団動態の解明」

お茶の水大学の高橋弥生です。この度はポスター発表賞をくださり、ありがとうございます。研究を始めてから 1 年程度で学会発表も初めてだったため、非常に嬉しい反面、恐縮しています。

私は現在、日本の地域固有植物種形成メカニズムに興味をもって研究を行っています。今回は典型的な日本海要素、ソハヤキ要素、フォッサマグナ要素が含まれるスミレサイシン節に着目しました。GRAS-Di 法で取得したゲノムワイド SNPs 情報を用いて、種間の系統解析と種内の系統地理解析を同時に行った結果、スミレサイシン節 5 種が第四紀中の約 40 万年から 130 万年前の間に急速に種分化した種群であること、各種内の集団間の分岐年代は数万年から数十万年レベルであることなどを明らかにできました。日本で限られた狭い地域にしか分布しないフォッサマグナ要素のヒメスミレサイシンが、実は最初に分岐していたことは非常に驚きでした。

今後は詳細な集団動態推定も行い、多様化の歴史を明らかにしていきます。また、スミレサイシン節に類似した地域固有の分布をもつ別の種群についても、同様の手法で解析・比較することで、どのような要因が日本列島での地域固有種の形成に影響したのかを明らかにできるのではないかと考えています。本研究を遂行するにあたり、多くの人々にサンプルの提供や実験・解析においての助言をいただきました。この場を借りて心より御礼申し上げます。



図 11. 高橋弥生さん



図 12. 高尾山のナガバノスミレサイシン

2023 年度 総会議事抄録

庶務幹事 西野 貴子

開催方法：千葉大学 西千葉キャンパス けやき会館、および WEB 会議システム Zoom ミーティングでのオンライン併用

日時：2023 年 3 月 4 日（土）14:15 ～ 15:25

1. 総会に先立ち、村上哲明会長、ならびに綿野泰行大会会長から挨拶があった。
2. 逝去された学会員への黙祷が捧げられた。
3. 伊藤元己会員が総会議長に選出された。

4. 報告事項

4.1. 会務報告

西野庶務幹事より、報告内容は第一号議案と同じであるため、議案審議の際に報告するとの説明があった。

4.2. 会員数について

國府方会計幹事より、会員数の説明がなされた。

4.3. 各委員会からの報告

絶滅危惧植物専門第一委員会、及び同第二委員会、植物データベース専門委員会、学会賞選考委員会、論文賞選考委員会、大会賞選考委員会、ABS 問題対応委員会、国際シンポジウム準備委員会、標本問題対応委員会、研究・普及推進委員会の各委員長またはその代理から活動報告がなされた。

5. 審議事項

審議に先立って、現地会場での総会出席者数、および Zoom ミーティングでの出席者数を合わせて合計出席者数の確認を行い、庶務幹事より総会出席者が 122 名（のちに 124 名）であることが報告された。

5.1. 【第一号議案】 2022 年度事業報告, ならびに 2022 年度決算報告

前年度の事業報告と決算報告が, 西野庶務幹事と國府方会計幹事よりそれぞれ説明された。池田啓, 大村嘉人両監事により, 会務および会計が適切であるとの監査結果が提示された。審議の結果, 賛成 121 票, 反対票 0 票, 白票 1 票で出席者の賛成多数をもって承認された。

5.2. 【第二号議案】 2023 年度事業計画, ならびに 2023 年度予算案

西野庶務幹事と國府方会計幹事より本年度の事業計画と予算案の説明があった (ニュースレター 88 号掲載のとおり)。審議の結果, 賛成 118 票, 反対 0 票, 白票 2 票の賛成多数をもって承認された。

5.3. 【第三号議案】『役員等の選出についての細則』についての第 1 条改定案

西野庶務幹事より改定案の提案理由の説明があり, 改定案が示された (ニュースレター 88 号掲載のとおり)。西山智明会員より選挙の時期自体の設定についての質問, 永益英敏会員より文言表記についての提言があった。審議の結果, 賛成 119 票, 反対 2 票, 白票 3 票の賛成多数をもって承認された。

5.4. 【第四号議案】 次期監事の選任について

村上会長より, 次期監事として大村嘉人会員, 池谷祐幸会員を推薦することが提案され, 賛成多数をもって承認された。

6. その他

6.1. 第 23 回大会開催地について

次の第 23 回大会について, 仙台にて開催されることが村上会長より告知され, 牧 雅之次回大会会長より挨拶があった。

6.2. 日中韓シンポについて

村上会長より, 本年 10 月 28 日から 30 日まで, 大阪公立大学 杉本キャンパス 田中記念館にて日中韓シンポをハイブリッド方式で主催することが告知され, その準備状況について説明があった。

6.3. 野外研修会について

鈴木担当委員より, 本年 7 月に石川県白山の有峰にて, 中田政司会員のお世話により開催されることが告知された。

6.4. APG への投稿のお願い

布施編集委員長より APG への投稿依頼がなされた。

2023 年度事業計画および予算

庶務幹事 西野 貴子

ニュースレター 88 号 (前号) にて掲載した 2023 年度事業計画案, および予算案は, 総会において修正はなく, そのまま承認されました。変更がないため本号での再掲は割愛いたします。

2022 年に到着した交換図書一覧

図書幹事 李 忠建

大阪市立自然史博物館研究報告 75

自然史研究 (大阪自然史博) 4 (5)

神奈川県植物誌調査会ニュース 91, 92

徳島県立博物館研究報告 32

植物学雑誌 135 (1), 135 (2), 135 (3), 135 (4)

植物研究雑誌 (KYO へ) 97 (1), 97 (2), 97 (3), 97 (4)

藓苔類研究 12 (7), 12 (8), 12 (9)

岐阜県植物研究会誌 36

近畿植物同好会会誌 45

近畿植物同好会会報 134, 135

兵庫植物誌研究会会報 129

奈良植物研究 43

鹿児島大付属演習林研究報告 47

鹿児島大学総合研究博物館研究報告 18

Acta Biologica Slovenia 61 (3)

Aliso 40 (1), 40 (2)

Annals of the Missouri Botanical Garden 106

Bauhinia 28

Boissiera 73

Bulletin Mensuel de la Société d'Histoire Naturelle de Toulouse 157

Candollea 77 (1)

Colloquium Geographicum 39

Conservatoire et Jardin Botaniques Geneve Rapport Annuel 2021

Fritschiana 98

Gardenwise 58

Kew Bulletin 43 (6), 44 (1), 44 (2), 44 (3), 77 (1), 77 (2), 77 (3)

Plant Ecology & Diversity 14 (3), 14 (4), 14 (5), 14 (6), 15 (1), 15 (2)

Revue Valdôtaine D'histoire Naturelle 74, 75

Smithsonian Contributions to Botany Vascular plants of Maryland, USA, Ochrophyta.111

Systematics and Biodiversity 19 (5), 19 (6), 19 (7), 19 (8)

Thai Forest Bulletin 48 (1), 48 (2), 49 (1), 49 (2), 50 (1)

Thaiszia 31 (1), 31 (2)

The Gardens' Bulletin Singapore 74 (1)

Willdenowia 51 (3), 52 (1)

国立台湾大学生物資源及農学院実験林報告 35 (4), 36 (1)

台湾大学実験林報告 36 (2)

国立台湾博物館学 73 (3), 73 (4), 74 (1), 74 (2), 74 (3), 74 (4), 75 (1), 75 (2), 75 (3)

寄稿

編集委員長の10年9ヶ月間を振り返る

日本植物分類学会前編集委員長・京都大学大学院理学研究科植物学教室 田村 実

私が、編集委員長に就任したのが2012年4月1日、2022年12月31日の辞任まで10年9ヶ月間、思い返せばいろいろなことがあった。将来の編集委員会の参考のため、ここで *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* の歴史を振り返っておきたいと思う。

ある程度の年齢の人には当たり前のことかもしれないが、現在の日本植物分類学会は、植物分類地理学会と（旧）日本植物分類学会とが統合して誕生した学会であり、現在の日本植物分類学会の英文誌 *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* は、植物分類地理学会の学会誌を受け継いでいる。植物分類地理学会は当時の京都帝国大学理学部植物学教室第III講座（現在の植物系統分類学研究室）を中心に設立され、学会誌 *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* は1932年に誕生し

ている。今年で 91 年目である。

今年の Acta Phytotaxonomica et Geobotanica は第 74 巻で、ほぼ毎年出版され、日本の植物分類学の成果を世界に発信し続けているが、さすがに戦中・戦後の 1944 年～1948 年には出版が滞っている。Acta Phytotaxonomica et Geobotanica の歴代の編集委員長／編集幹事は表 1 の通りである。いつの間にか私は、平野實先生、大井次三郎先生に次いで、歴代で 3 番目に長く編集委員長を仰せつかったことになる。この 10 年 9 ヶ月の間で何ができたか — 重要なことは、恐らく 2 つであろう。1 つ目は、それまで不定期刊行に陥りかけていた Acta Phytotaxonomica et Geobotanica を定期刊行に戻したこと、2 つ目は Acta Phytotaxonomica et Geobotanica に Impact Factor を付与してもらったことである。

表 1. Acta Phytotaxonomica et Geobotanica の歴代の編集委員長 (編集幹事)。

巻号	出版年	編集委員長／ 編集幹事名 (所属)	在任期間
第1巻1号	1932	不明 (京都大・理)	
第1巻2号～第12巻3号	1932-1943	大井次三郎 (京都大・理)	11年5ヶ月
第12巻4号	1950	不明 (京都大・理)	
第13巻 (小泉博士還暦記念号)	1943	北村四郎 (京都大・理)	
第14巻1号～第14巻3号	1949-1951	不明 (京都大・理)	
第14巻4号	1952	田川基二 (京都大・理)	
第14巻5号～第19巻6号	1952-1963	平野 實 (京都大・理)	20年9ヶ月
第20巻 (第30周年記念号)	1962	北村四郎・平野 實	
第21巻1号～第25巻6号	1964-1973	平野 實	
第26巻1号～第32巻6号	1974-1981	岩槻邦男 (京都大・理)	9年1ヶ月
第33巻 (創立50周年記念号)	1982	岩槻邦男	
第34巻1号～第37巻6号	1983-1986	小山博滋 (京都大・理)	8年8ヶ月
第38巻 (北村四郎先生80歳祝賀記念)	1987	小山博滋	
第39巻1号～第41巻6号	1988-1990	小山博滋	
第42巻1号～第44巻2号	1991-1993	北川尚史 (奈良教育大)	3年
第45巻1号～第50巻2号	1994-1999	戸部 博 (京都大・総人)	6年
第51巻1号～第60巻1号	2000-2009	岡田 博 (大阪市大・理)	9年3ヶ月
第60巻2号～第62巻1号	2009-2012	永益英敏 (京都大・博物館)	3年
第62巻2号～第73巻3号	2012-2022	田村 実 (京都大・理)	10年9ヶ月
第74巻1号～	2023-	布施静香 (京都大・理)	

第1巻 (1932) ～第12巻3号 (1943) は毎年4冊、1944–1948年は休刊、第14巻1号 (1949) ～3号 (1951) は毎年1冊、第14巻4号 (1952) ～第18巻 (1960) は毎年2–4冊、第19巻 (1961) ～第25巻 (1973) は毎年1–2冊、第26巻 (1974) ～第54巻 (2003) は毎年2冊、第55巻 (2004) ～第59巻 (2008) は毎年3冊、第60巻 (2009) ～第63巻1号 (2012) は毎年2–3冊、第63巻2号 (2013) ～第64巻3号は1年5冊、第65巻 (2014) 以降毎年3冊。

不定期刊行から定期刊行に戻すために私が何をしたか。これには多くの方々から論文を投稿してもらわなければならなかったため、とにかく論文を投稿してくれそうな方々をお願いし続け、多くの方々御快諾下さった。私の10年9ヶ月間に及ぶ編集委員長としての在任期間中（Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 62巻2号～73巻3号）に特に多くの論文を御投稿下さった方々の一部を表2にリストし、感謝の意を表したい。おかげさまで、何とか定期刊行に戻すことができた。

表2. 田村の編集委員長としての在任期間中（Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 62巻2号～73巻3号）の論文著者（一部）。特に多くの論文をご執筆くださった方々を示し、感謝の意を表したい。誌面の都合上、全ての論文著者を示せないことについてご容赦いただきたい。各人の所属は、私の知る範囲内で73巻3号までの最新のものとした。

末次健司（神戸大・院・理）30本、田金秀一郎（鹿児島大・博物館）22本、矢原徹一（九州オープンユニバーシティ）22本、田村実（京都大・院・理）16本、遠山弘法（国立環境研究所）15本、布施静香（京都大・院・理）15本、内貴章世（琉球大・熱帯生物圏研究センター）13本、塚谷裕一（東京大・院・理）11本、永益英敏（京都大・博物館）11本、村上哲明（東京都立大・牧野標本館）11本、海老原淳（国立科学博物館）10本、加藤雅啓（国立科学博物館）10本、厚井聡（大阪公立大・植物園）10本、Phourin Chhang（カンボジア森林野生生物研究所）10本、岡田博（大阪市立大学）9本、早川宗志（ふじのくに地球環境史ミュージアム）9本、堀清鷹（高知県立牧野植物園）9本、Van-Son Dang（ベトナム熱帯生物学研究所）9本、牧雅之（東北大・植物園）8本、瀬戸口浩彰（京都大・院・人環）7本、戸部博（京都府立植物園）7本、角野康郎（神戸大学）6本、阪口翔太（京都大・院・人環）6本、藤井紀行（熊本大・院・先端科学）6本、横山潤（山形大・院・理工）6本、Monica Suleiman（サバ大・熱帯生物学研究所）6本、大井一東馬哲雄（岡山理大・自然フィールドワークセンター）5本、首藤光太郎（北海道大・博物館）5本、中藤成実5本、邑田仁（東京大学）5本、綿野泰行（千葉大・院・理）5本、NguyenVan Ngoc（ダラット大・生物）5本

Impact Factorの付与については、仲田崇志さん（北海道大学）・海老原淳さん（国立科学博物館）・西田佐知子さん（名古屋大学）に全てをお任せした。この御3人は、日本だけでなく、海外の本社にも積極的にコンタクトをとって、この懸案事項を推進して下さい。おかげさまで、Acta Phytotaxonomica et GeobotanicaにImpact Factorが付与され、Web of Scienceなどに掲載されるようになった。御3人には大変感謝している。

ずいぶん前になるが、2015年の第9回日本植物分類学会奨励賞の受賞講演で、保坂健太郎さん（国立科学博物館）が「Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 論文の筆頭著者とNature 論文の数十番目の著者との間で、個人の学問への貢献度はいったいどっちが高いのであろうか」と私たちに問いかけた。今や、論文の検索システムが発達し、雑誌の種類によらず多くの論文がインターネットで読める時代になった。サーキュレーションの良し悪しによる雑誌の評価の差は縮まって来ているように感じる。つまり、雑誌の名前ではなく論文内容での評価がますます重要な時代となり、評価者の学力と見識が問われる時代になってきたと感じる。

今年から布施新編集委員長のもと、Acta Phytotaxonomica et Geobotanica は日本植物分類学会が研究成果を世界に発信する媒体として、さらなる飛躍を遂げようとしている。今後とも、日本植物分類学会会員の皆様には、Acta Phytotaxonomica et Geobotanica への積極的な御投稿をお願いします。

最後に、担当編集委員 (Editors) の皆様並びに査読者の皆様には、Acta Phytotaxonomica et Geobotanica を少しでも良くしたいがゆえの並々なぬ御尽力を常に感じており、深く感謝する。担当編集委員の皆様には編集担当をお願いして、断られた記憶が私にはない。そして、この 10 年 9 ヶ月間、私の編集委員長としての拙い舵取りを暖かく見守って下さった日本植物分類学会会員の皆様に厚く御礼申し上げる。

お知らせ

2023 年度日本植物分類学会 野外研修会のお知らせ

野外研修会担当 鈴木 武

富山県中央植物園の協力で、8 月 1 日 (火) に富山市^{ありみね}有峰県立自然公園での自然観察、2 日 (水) は希望者を対象に富山県中央植物園の見学を行います。

【8 月 1 日】有峰県立自然公園 <http://www.arimine.net/index.html>

富山市の南東部 (旧大山町)、薬師岳の麓に広がる標高 1,100m の高原盆地です。有峰ダムによる人造湖、有峰湖周辺で、富山県生物学会会員、佐藤卓博士の解説・ご案内により観察を行います。注目は最近確認されたチョウセンミネバリ。

小型バスをチャーターし、JR 富山駅 7 時 30 分出発、途中、道の駅「立山あるぺん村」でトイレ休憩、9 時すぎ有峰湖着。午前中は冷タ谷遊歩道 (ミズナラ林・カラマツ林) を歩き、昼食を冷タ谷キャンプ場でとります。昼食は弁当を用意します。午後は東西半島遊歩道 (ゴヨウマツ、チョウセンゴヨウ)、または猪根山遊歩道 (ブナ林) を歩く予定です。現地出発は 15 時。途中「立山あるぺん村」で休憩、富山駅着 17 時の予定です。

集合：7 時～7 時 30 分、JR 富山駅の集合場所は、参加者に連絡いたします。

【8 月 2 日】富山県中央植物園 <https://www.bgtym.org/> (希望者のみ)

9 時に入園口に集合。バスは不便なため、タクシーを乗り合わせて直接ご来園下さい。最初にバックヤードと温室をご案内し、その後自由に園内を見学していただきます。池で屋外栽培しているパラグアイオニバスは世界一の規模で、8 月 4 日から子供を乗せるイベントを開催します。昼食は園内の喫茶室が利用できますが、お弁当の予約も受け付けます。

午後から希望者 (事前申し込み) を対象に、標本室 (TYM) の標本閲覧と、文献室の貴重図書 (Curtis's Botanical Magazine) の閲覧を行います。写真撮影可。

帰りも、タクシーを乗り合わせてご利用ください。JR 富山駅、富山空港とも、15 分程度です。

【宿泊】参加者でご予約下さい。JR 富山駅周辺が便利です。

- ・有峰湖周辺はツキノワグマの生活圏です。観察時の単独行動はご遠慮ください。
- ・前日 (7 月 31 日) の夜、18 時から JR 富山駅周辺で、自由参加による懇親会を開催します。観察会申し込み時に併せてお申し込み下さい。詳細は人数確定後にご連絡いたします。

【参加費】 8,000 円 8 月 1 日集合時徴収

内訳：バス代（有料道路通行料込み）、保険代、1 日・2 日弁当代（不要の方には返金いたします）、講師謝礼、資料代、熊撃退スプレー代、通信連絡費ほか。残金は返却します。

・ご自宅から JR 富山駅までの往復交通費、宿泊代、オプションの富山県中央植物園までのタクシー代往復は 個人負担です。

【募集人数】 20 名程度**【申し込み・問い合わせ先】 中田政司（富山県中央植物園）**

メール：nakata@bgtyim.org FAX: 076-465-5923

郵便：〒 939-2713 富山市婦中町上轡田 42 富山県中央植物園

・お申し込みの際に緊急時にご連絡できるお電話番号をお知らせください。

・ご連絡いただいてから 3 日以内に受付の返信をいたします（郵便の場合にはお電話を差し上げます）。万が一、返信等がない場合には、恐れ入りますが再度ご連絡いただきますようお願い申し上げます。

【その他】

・有峰県立自然公園では採集が禁止されています。今回、富山県植物誌改訂のための植物相調査の一環として、分類学会会員による植物研究の目的で、採集許可を申請する予定です。

国際植物分類学シンポジウム**"The 10th East Asian Plant Diversity and Conservation 2023" のご案内**

国際植物分類学シンポジウム 2023 実行委員会委員長 厚井 聡（大阪公立大学附属植物園）

日本・中国・韓国の植物分類学関連学会の共主催による、東アジアの植物多様性と保全に関する国際シンポジウムを今年の秋に大阪で開催いたします。今回は、3 カ国からの招待演者による口頭発表（対面およびオンライン）のほか、ポスター発表（オンライン形式）とエクスカージョンを予定しています。ポスター発表には、本学会の会員の皆さまはどなたでもお申し込み頂けるほか、優れた発表を行った若手会員にはポスター発表賞を授与する予定です。ぜひ参加・発表して頂きますよう、お願いいたします。詳細は、シンポジウムのホームページ（<https://2023sym.e-jsps.com/>）ならびに次号のニュースレターでご案内いたします。

【日程】

2023 年 10 月 28 日（土）～ 10 月 30 日（月）

10 月 28 日（土）口頭発表・ポスター発表※・懇親会

10 月 29 日（日）口頭発表・エクスカージョン 1

10 月 30 日（月）エクスカージョン 2

※ Zoom ミーティングによる発表を予定しています。ポスターの閲覧・チャット機能を用いた質疑応答は 10 月 27 日（金）から開始する予定です。

【会場】

大阪公立大学 田中記念館（大阪府大阪市住吉区杉本 3-3-138）

【発表形式】

口頭発表：ハイブリッド形式（対面および Zoom ミーティング）

ポスター発表：オンライン形式（LINC Biz および Zoom ミーティング）

【問い合わせ先】

国際植物分類学シンポジウム 2023 実行委員会委員長 厚井 聡

〒576-0004 大阪府交野市私市 2000 大阪公立大学附属植物園

Tel : 072-891-2681 / E-mail : gr-sci-sympo2023@omu.ac.jp

日本植物分類学会第 23 回大会（仙台）のお知らせ

第 23 回大会会長 牧雅之

日本植物分類学会第 23 回大会を下記の通り開催いたします。大会および参加申込みの詳細は、大会ホームページおよび 2023 年 11 月号のニューズレターでお知らせいたします。

【会場】

東北大学片平キャンパスさくらホール 宮城県仙台市青葉区片平 2-1-1

【日程】

2024 年 3 月 8 日（金）各種委員会・評議委員会（於：東北大学植物園）

3 月 9 日（土）研究発表・公開講演会（いずれも午後）

3 月 10 日（日）研究発表

3 月 11 日（月）研究発表・総会・受賞講演・懇親会

3 月 12 日（火）研究発表

【ホームページ】

現在作成中。アクセス可能になり次第、日本植物分類学会のホームページ等にて連絡いたします。

【問い合わせ先】

日本植物分類学会第 23 回大会（仙台大会）大会実行委員長 伊東拓朗

〒980-0862 宮城県仙台市青葉区川内 12-2 東北大学植物園

E-mail: takuro.ito.c4@tohoku.ac.jp

書評

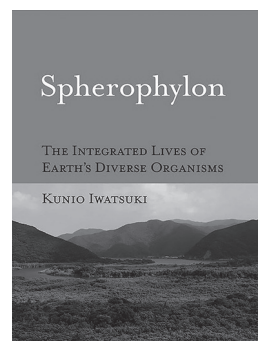
Spherophylon The Integrated Lives of Earthe's Diverse Organisms

岩槻邦男 著 ブックエンド 発行 ISBN : 978-4-907083-81-6

価格 3,000 円 + 税 B5 変型判 2023 年 3 月 3 日

基礎生物学研究所 長谷部光泰

「これ検収必要ですか？」という声とともに、分厚い封筒が届いた。当学会元会長の岩槻邦男先生が書かれた「Spherophylon: The Integrated Lives of Earth's Diverse Organisms (2023)BOOKEND」という 211 ページの英文書籍が同封されており、



Letter Headに自宅住所が書かれた手紙には、「コロナで自宅に滞在する時間が長くなったので、Flora Malesiana のコケシノブ科のモノグラフを仕上げ、並行して本書をまとめあげました（要約）」とあった。思わず「えっ、まじっ」と驚きつつ、笑顔で「検収は不要です」と応答した。嬉しくなると、お茶部屋でゲノム解析の相談をしていた中国と南アフリカの留学生に、「My professor just sent me a book he recently wrote. He hasn't changed since I was his graduate student. This is his approach to "education" for students.」と言ったらきょんとしていた。

本書は、1999年に岩槻先生が出版した「生命系」（岩波書店）の英文増補版である。生命系 Spherophylon という概念の新規性は、「生態系」、「生物圏」、「ガイア」などの概念が「現在の」地球環境を考えるに対し、進化的視点から生命の歴史性と継続性を取り入れた点にある。系統分類学を専攻した著者ならではの視点であり、「生命系は、生物圏という空間的広がり、系統という生物の進化の歴史とを統括した実態を意味しているのだと理解したい」と述べている。系統分類学者にとってはしっくりくる考え方である。

筆者の独自性が高い点は、生命系が「人間を含んだ系」であることを強調し、人間の入り込まない自然を保全するというのではなく、人間を含めた生物全体で環境創生していこうという考え方を提唱している点にある。「自然を自分たちの思うままに征服することでもなく、何でも自然第一に考えることでもなく、人と自然が調和ある共存を図ること、それが自然になじむということである。」と述べている。そして、新石器時代の農業の創出が、狩猟採集という自然の搾取から、自然との共存を可能とし、人口増加による自然破壊を防ぎ、人類と自然の両方の共存をもたらしたと評価している。自然と人間を対峙したものとしてとらえる二分論的イデオロギーとは異なり、共存共栄から新しい普遍性を作り出そうというアジア的価値観、京都的哲学に基づいているように感じた。そして、「文明が育てた植物たち」（東京大学出版）を読むと、この考え方が筆者自身のこれまでの生物学者としての研究に裏打ちされたものであることがわかる。

人口増加の元、人と自然の調和ある共存が求められているが、イデオロギーと利害の対立の中、実行可能な具体的方策は見いだされていない。そして、本書でも、近々の具体策は提示されない。代わりに、よりよい生活環境の創生には、「現状を正しく認識し、地球に生きる人の生を時空を超えた生命系の生と理解すること」が必要であると説いている。我々の考え方の根本を変えることによって、自ずと方策が導き出されるようにしようとしているように思われる。自然保護と開発という対立軸ではなく、両者を包含し、結果として、生物多様性が維持される社会を作るためには、根本を変える必要があり、それが現在取りうる最善の方策であるという判断なのだろう。岩槻先生は、「education は教育ではなく、自ら育つことを妨げないこと」だとおっしゃっていたが、本書を通じて、人類を educate しようとしているのではないかと思った。

人類全体を educate するには、英訳は必須のプロセスである。そして、Foreword を執筆した Peter H. Raven 博士が、本書の内容のほとんどの賛同しつつも、農業の発明や種の絶滅への本書の評価について、異論を提唱していることは、見事に、筆者の目論見が功を奏していることを示している。今後、世界中の人々が本書を読み、自分なりに解釈し、思考を深め、最終的には、生物多様性が保全されるとともに人類が繁栄できる方策が導き出されることを期待したい。

今後の活動として、筆者は「生命系」に宗教と芸術の概念を包含したいと述べている。それも、関西人である筆者の独自の思考体系に基づいて行われることが、Preface の最後の一文から推察される。「I hope to have a chance to expand the discussion of the spherophylon to include these aspects, though I do not know when that will be possible (知らんけど〜)。」これまた、大いに期待したい。

編集室
より